

## 博士論文要旨

著者 包 特古斯

論文題目 少数言語の防衛と排除：漢語、モンゴル語およびその「方言」

本論は、1947年の内モンゴル自治政府成立から文化大革命が終了した後の1985年までの時期における中国領内のモンゴル語を研究対象とするものである。

580万人の話者数を有する（2000年の統計）中国領内のモンゴル語は、その話者数において決して少数とは言えないが、12億4千万人の話者（2000年の統計）を持つ漢語の存在によって少数言語とされている。こうした少数言語であり、漢語からの脅威にさらされている中国領内のモンゴル語の、その規範化問題をはじめとする様々な問題に際して見せる傾向が、それを構成する諸方言にもろに反映させる。たとえば、漢語からの圧力が比較的緩い時期には、話者数においてモンゴル語話者全体の大多数を占めながらも、漢語の影響が最も強い東部方言に対しては常に排除する傾向を示すが、高圧的な政治情勢のなかで、漢語による圧力が強まると東部方言は、その漢語的特徴を有しているがゆえに「先進的存在」として評価されるのである。こうした関係性は、東部方言と対照的で、漢語の影響が弱く、かつモンゴル国に近い西部方言にも反映されている。

本論文は、こうした漢語、モンゴル語およびそれを構成する諸方言間のダイナミックな状況をとらえることによって、少数言語、ひいてはマイノリティ集団に示される防衛と排除のメカニズムを示そうとするものである。

本論文は序章、第1、2章からなる第1部、第3章からなる第2部、第4、5章からなる第3部、第6章からなる第4部と終章から構成されている。

序章では、まず、漢語と少数言語である中国領内のモンゴル語、およびそれを構成する諸方言間のダイナミックな関係性を示し、それから論文の構成と先行研究を述べた。

第1部では、建国初期の比較的緩やかな民族政策および友好的な中ソ関係のなかで、中国領内のモンゴル人たちが、モンゴル国との文字の統一化から、書きことばの統一化を図っていく過程、そしてそれが挫折していく過程を述べた。

第1章では、中国領内のモンゴル人たちが伝統的モンゴル文字を廃止し、モンゴル国で使用されているキリル文字に切り替えることで、モンゴル国との文字統一化を図ろうとする動きを述べている。

今回の文字統一化運動の直接の動機は、20世紀前半期における内外モンゴル間の統一化運動の挫折、それによって強いられた国家的・言語的分断であったとすれば、それを可能にしたのは、1950年代初期の親密な中ソ関係、それから当局の緩和な民族政策であった。

内モンゴルでのキリル文字導入の動きは、1947年の内モンゴル自治政府設立当初から始まり、建国後にも継承され、1955年7月に至って正式に決定された。決定後の内モンゴルでは、キリル文字が急速に普及した。

第 2 章では、キリル文字によるモンゴル国との文字の統一化から書きことばの一致へと発展してゆき、そして挫折する様子を述べた。

モンゴル国との書きことばの一致という点では、内モンゴルのモンゴル人たちには二つの選択肢があった。つまり、モンゴル国の書きことばをそのまま導入する方法、それからモンゴル国に近い方言を基礎方言にして書きことばを確立させ、それを徐々にモンゴル国の書きことばに近づけていく方法である。一致という結果からすれば、前者の方がより便宜的であるに違いないが、国境によって隔たれている現実からすれば、そう簡単にはいかない。二つの方法の採用をめぐる揺れ動く中、方言調査が実施され、各方言の特徴が明らかになると、今度は、モンゴル国から遠く離れた東部方言を基礎方言にすべきとの意見も加わり、書きことばの基礎となる方言選定をめぐる議論が勃発した。議論の末、モンゴル国に近い西部方言を基礎方言として書きことばを確立させ、それをモンゴル国の書きことばに徐々に近づけていくことで合意した。

こうした議論と並行して、内モンゴルでは、実際にモンゴル国の書きことばが用いてキリル文字を普及させていたため、多くのモンゴル国の語彙が内モンゴルのモンゴル語の中に取り入れられていた。そして、内モンゴルでのキリル文字化の動きに連動して、モンゴル国でもついに、それまでの正書法を改定しようとする論争が引き起こされ、その延長線上に、今度は、内外モンゴルの書きことばの統一化を見込んだ「正書法学術討論会」が 1957 年 7 月ウランバートルで開催された。

ところだ、時期を同じくして、中国国内では反右派闘争が起こり、その反動で民族主義に対する批判が集中し、モンゴル語のキリル文字化も次第に危うくなっていく。そして、1958 年 3 月に、内モンゴル自治区人民委員会は、ついにキリル文字化を断念し、モンゴル文字を継続使用する決定を公布した。これによって、内外モンゴル間の文字の分断は再び現実となり、今日まで続くことになった。

第 2 部では、モンゴル語のキリル文字化が挫折してから、益々厳しくなる政治情勢の中で、モンゴル語が強制的に漢語への「接近」を図られていく過程を述べた。

モンゴル語のキリル文字化運動を挫折に追い込んだ反右派闘争に続き、大躍進運動という新たな政治運動が発生し、諸民族の漢族への接近と融合が提唱された。モンゴル語の中にそれまでに導入されたモンゴル国からの語彙は次々と追放され、漢語の語彙に取って代わられた。こうした事態に、一部のモンゴル人たちは抵抗を示したが、もう一部のモンゴル人たちは妥協する姿勢を見せた。

そして、これまでに漢化の度合いが高いために「混合語」として貶されていた東部方言は、「先駆的な」存在として「再評価」されることになった。漢語寄りを主張した人々は、この東部方言を基礎方言に選定するために、「混合語」は言語の発展において必要であるという言説を編み出し、さらにモンゴル語の方言を再分類することを行った。

第 3 部では、政治と言語（モンゴル語）の関係、つまり、言語問題が政治問題と見なされ、そして言語が政治宣伝と闘争手段として利用されていく過程を述べた。

第4章では、大躍進運動に続く、四清運動の中のモンゴル語の状況を述べた。大躍進運動は失敗に終わると、その反省で、漢語寄りの語彙方針も一時的に見直されたが、それも長続きすることなく、間もなくして始まった四清運動の中で、モンゴル語は再び漢語寄りを強要される。

四清運動は、「民族問題は階級問題である」という言説を用いて、諸民族の漢族への同化を促そうとした。そして、モンゴル語の中の漢語の語彙は益々増加していった。四清運動は、モンゴル語に対する漢語への同化というそれまでの政治運動が用いてきた手法にとどまらず、それまでの言語問題まで追究した。1950年代のモンゴル語のキリル文字化に関わったことのあるブレンサインは、「民族分裂主義者」として逮捕され、批判された。その批判のなかで言語問題は重要な位置を占めていた。

第5章では、現代中国史上最大の政治運動である文化大革命の中のモンゴル語の状況を述べた。

内モンゴル自治区における文化大革命のなかで、多くの人々は、言語問題に携わった過去によって罪人とされ、厳しい仕打ちを受けた。そして、言語問題への追及だけではなく、モンゴル語自体が政治の宣伝・闘争手段と化して、文革の中の批判と闘争を一段と高めていく結果となった。

第4部では、文革が収束に向かい始めた1971年から1985年までの状況を述べている。文革が収束に向かう中、ほとんど停止状態にあったモンゴル語事業は再開された、その中で、最も重要な役割を果たしたのは、中国領内の各モンゴル人居住地のモンゴル語文工作を指導する機関「八協」であった。「八協」の動きに連動して、一部のモンゴル語文工作者は、モンゴル標準語の基礎方言問題を提起し、基礎方言・標準音問題をめぐる議論は再び行われた。議論の末、1950年代のキリル文字化の際の標準語に近い方言を標準音とすることで合意した。しかし、実際には標準語自体が確立されず、今日に至ってもなお、モンゴル文語の継続使用が続いている。

終章では、もともと「非純潔な存在」とどまっていた東部方言が、文革のような政治運動を経てからは、モンゴル語を崩壊に導く「危険な存在」とみなされるような過程を論じ、少数言語の多様性についての展望を述べた。